

# 和泉国湊浦松屋善三郎船遭難についての浦手形

——津田秀夫文庫古文書より——

中田佳子

## はじめに

関西大学博物館古文書室では、本学の元教授で文学部史学・地理学科で教鞭をとった津田秀夫が、生前長年にわたって収集した古文書・和書類を「津田秀夫文庫」として収蔵している。戦後の日本近世史学において地方文書を用いた実証的研究により、とりわけ社会経済史の分野で学会をリードした津田は、摂河泉地域における精力的な史料探訪とともに、古書店等を通じて古文書・和書類を購入、収集に努めていた。

一九九二年一月に津田秀夫が逝去した後、彼のコレクションは大阪市史編纂所にいったん納められ、一九九六年一月、改めて本学文学部古文書室（当時）に寄贈された。古文書は一から五三までの数字の付いた平箱に収納されていて、大きく地域別に分けられていた。このほか、和本類が一一箱あり、整理の過程で別置の史料や津田の手稿等が二箱追加された。ただ、古文書については、家別文書としてまとめられたものは

少なく、同じ村や家・機関（役所など）の文書が複数の箱から出てきたり、出所不明や断片的なものが数多く混在していたりして、雑然とした状況である。津田の没後、箱詰めや移送、史料利用のたびに人の手が入っていることも、混乱を拡大させる要因であったかもしれない。

古文書室では、箱ごとに古文書の整理・仮目録化に取り組み、家別・地域別・機関別文書としてある程度のまとまりを確認できるものから、目録と概要を『関西大学博物館紀要』等に掲載してきた<sup>①</sup>。それ以降は、点数が不十分、また選別が困難なことなどから、新たな目録は作られていない。古文書室が博物館に移管された二〇一七年度以降は目録作成方針を転換し、家別・地域別・機関別方式から箱別でのエクセル表による詳細なデータ入力方式に切替え、現在作業を進めているところである。

本稿で紹介する和泉国湊浦松屋善三郎船遭難についての浦手形一通は、その過程で見出された興味深い史料である。湊浦（現、大阪府泉佐野市湊）は江戸時代前期から後期の初めまで、同国の佐野・貝塚などと並ん

で廻船業が盛んで、松屋善三郎はその船主の一人であった。浦手形は近世に作成された海難証明書であり、浦証文・浦状・浦切手・灘証文など様々な呼称がある。作成の対象は、海損の責任をめぐって訴訟に発展しやすい海運での事故である。日本沿岸では、船舶輸送が活発化することによって海難事故が多発したため、浦手形自体は珍しいものではない。だが、作成年代が江戸時代中期の享保一〇年（一七二五）で比較的古く、また、湊浦の場合は当時の廻船活動の実態を示す史料が少ないため、貴重である。本稿では、史料の翻刻に基き、海難の状況とそれに対する処置、湊浦と船主の松屋善三郎について、解説および考察を加える。

## 一 浦手形の翻刻

本史料は、享保一〇年の四月二五日から八月一二日にかけて（新暦では六月五日～九月一八日）、和泉国日根郡湊浦の松屋善三郎が所有する船が出羽国秋田湊に赴き、米と小豆を買い付けた帰路に、隠岐国の島後で難破した顛末を記録したものである。文書は縦二三・五～二四・一センチ、横五七・六～七センチで、一七紙を継いでいる。押印がないので原本ではなく、写しである。字体は癖がなく整っていて、保存状態がよく、内容の重要性から大切に保管されていたと思われる。翻刻に当たっては、原文通りに改行し、それぞれ上に行番号を付した。なお、肩書の付いた人名や、傍注のある項目、割注などは全体で一行と見なす。

### 一 指上ケ申口上之覚

- 二一、小堀備中守様御知行所泉州湊浦
- 三 松屋善三郎船、沖船頭庄右衛門・水主共二拾三人乗、四月廿五日国本出船、五月廿八日羽呂
- 四 秋田湊へ下着仕、米三斗三升入式千貳百俵
- 五 余、小豆三斗入百俵買立、六月廿四日〆廿六日迄積受之、同廿八日秋田湊致出船、湊
- 六 風<sup>三</sup>而七月五日佐州小木浦へ入津、同七日
- 七 出船、同国沢根浦へ着津仕、同十八日出船、
- 八 同廿一日能州福浦へ入津、八月朔日彼地
- 九 致出船、走せ登り候処、同三日朝〆辰巳
- 一〇 風ニ罷成、御当地山近ク罷成候処、同日昼
- 一一 時分〆以之外成ル大南風ニ罷成、難凌
- 一二 御座候二付、段々米刎捨、舟足ヲ輕め、
- 一三 何とそ矢尾村湊へ入津仕度奉存、帆
- 一四 を三枚続程持、随分ひらき寄、余程
- 一五 湊口へ趣候時節、梶<sup>梶</sup>ノ尻掛ケ綱切レ、梶
- 一六 はき出し申二付、船中之者驚キ、其
- 一七 俣帆をおろし、尻かけ替可申与菟
- 一八 や角仕候内、磯近ク罷成、せり上ケ申二付、
- 一九 津井村外浦たつぎと申所之西ノ方
- 二〇 鼻脇ニ、式番鉄碇・三番鉄碇ニ加賀
- 二一 芋綱指シ掛り申候へ共、大風・大波、殊ニ
- 二二 底浅<sup>三</sup>而本船もり沈、水舟ニ罷成候二付、
- 二三
- 二四

二五	船中之者申合、此分 <sup>ニ</sup> 而荒磯巖壁へ打	四八	拾人之もの共、若陸へ被打上ケ、怪我
二六	揚ケ候へ者、中々老人も助り申者無御坐候間、	四九	杯いたし罷有候哉、又ハ死骸等打揚ケ
二七	何とぞ橋舟 <sup>ニ</sup> 而たつぎ浦之浜中へ参候ハ、	五〇	候哉と近浦御吟味被成候へ共、死骸
二八	命助り可申与相談仕、拾三人之者不残	五一	相見へ不申候、尤船具等打上ケ候ハ、
二九	橋舟ニ乗り候へ共、碇ノ尻手綱を筒ニ	五二	とり揚ケ可被下由二候へ共、大波 <sup>ニ</sup> 而中々磯
三〇	仕懸ケ候間、綱 <sup>ニ</sup> 而橋舟を押へ、おり不申	五三	際へ寄付不被申候二付、破損場二番人
三一	候二付、波 <sup>ニ</sup> 而橋舟浮キ候時節を見合、	五四	稠敷被附置、右之趣早速御役
三二	右仕掛ケ候綱ヲ一拍子二切捨テ、械 <sup>機</sup> ニ而	五五	所様へ被仰上候由 <sup>ニ</sup> 而、御役人様方
三三	浜中之方へかき寄候処、大波ニ橋舟ヲ	五六	御出被成、私共三人へ破船之様子御
三四	打かへし申候二付、橋舟ノ瓦 <sup>瓦</sup> ニ何れも	五七	尋被遊、船往来・積荷状等取上り
三五	とり付居申候へ共、打続キ大波ニ打ま	五八	候哉与御吟味被成候へ共、裸 <sup>ニ</sup> 而波ニ打
三六	くられ、拾三人之内冲船頭庄右衛門、艫取	五九	上ケられ候仕合 <sup>ニ</sup> 而候へ者、往来手形
三七	七郎兵衛・忠五郎、水主八兵衛・助太郎・市右衛門・	六〇	とり揚不申候、尤積荷状之儀 <sup>者</sup> 、自分
三八	権太郎・庄七・久兵衛・金太、以上拾人、	六一	荷物 <sup>ニ</sup> 而御座候へハ所持不仕旨申上候へハ、
三九	底へ沈相見へ不申候、私共三人 <sup>者</sup> たつき	六二	逸々御聞届ケ被成、津井村之儀小村 <sup>ニ</sup> 而
四〇	浦浜へ打上ケられ、危キ命助り申候、	六三	御座候故、近村之衆中迄大勢御呼寄、
四一	本船ハ其俣磯へ打上ケ破船仕候二付、	六四	海上流レ浮キ沈候船道具共ニ御取集、
四二	私共三人同道いたし、津井村在所へた	六五	沈米も段々被入御情 <sup>前</sup> 、九百七拾俵余
四三	つき浦 <sup>分</sup> 八町程御座候二付、同日七ツ時分ニ	六六	御取上ケ被下、難有奉存候、私共三人共ニ
四四	尋参り、右之趣庄屋・年寄衆へ御注	六七	裸 <sup>ニ</sup> 而揚り申候二付、着物等可被仰付旨、
四五	進申上候へハ、着物杯御貸シ御介抱被	六八	何 <sup>ニ</sup> 而茂用事も有之候ハ、可申上由、
四六	成、早速庄屋・年寄衆、私共、村中之衆	六九	被入御念被仰聞、段々御介抱被仰付、
四七	中大勢召連、破船場へ御出被成、相果候	七〇	忝奉存候、着物之儀ハ、喜太郎 <sup>与</sup> 申もの

七一	之柳 <small>(行李)</small> こり <small>き</small> 沓ツ上り申候、此内ニ有之候間	九四	願之通被仰付、難有奉存候、則
七二	とり合、三人共ニ着シ申候ニ付、此段者	九五	預ケ置罷戻り申候
七三	御願不申上候、其外船頭・水主衣	九六	一、相果候もの共之死骸之儀、在所之
七四	類、身付之道具透と揚り不申候、尤	九七	衆中へ被仰付、数日御尋被下候処、
七五	舟滓等 <small>茂</small> 多ク上り不申段、若村中之	九八	沖船頭庄右衛門、鱸取七郎兵衛・忠五良、
七六	もの夜中ニ忍ひ取候哉 <small>与</small> 稠敷御吟	九九	水主八兵衛・助太郎・市右衛門・權太郎・
七七	味被遊候へ共、毛頭左様之儀無御座候、	一〇〇	庄七、以上八人ハ当月九日迄ニ死骸
七八	破損場之義、荒磯潮早成ル所、其上西	一〇一	上り申候、久兵衛・金太死骸ハ揚り不
七九	風ニ替り吹出し候ニ付、米・船道具共ニ悉	一〇二	申候、依之近村 <small>江</small> 被仰付、段々御
八〇	ク沖へしびき出シ流レ捨り申候、少 <small>茂</small>	一〇三	吟味之上御尋被下候へ共、潮波ニ沖へ
八一	对在所之衆へ申分無御坐候、諸事	一〇四	流レ出候哉、相見へ不申候、右揚り候死
八二	明白成ル被成方、段々御世話ニ罷成、	一〇五	骸八人之内、船頭庄右衛門、鱸取忠五郎、
八三	辱奉存候	一〇六	水主助太良・市右衛門ハ真宗 <small>ニ而</small> 御座候間、
八四	一、濡米之儀、如何仕候哉 <small>与</small> 御尋被遊候、海底	一〇七	矢尾村真宗蓮光寺 <small>ニ而</small> 結縁頼
八五	<small>ニ而</small> 大波ニゆられ、殊之外痛申候、其上	一〇八	葬申度候、鱸取七郎兵衛、水主八兵衛・
八六	大分之俵数、干立取戻り申儀難	一〇九	權太郎・庄七儀ハ浄土宗 <small>ニ而</small> 御坐候間、
八七	成御座候間、早速御払被下候様ニ御	一一〇	目貫村浄土宗善立寺結縁頼
八八	断申上候へハ、願之通入札ニ被仰付、難	一一一	葬申度旨奉願候へ <small>者</small> 、願之通被仰
八九	有次第奉存候、舟滓之義も是又	一二二	付候間、右両寺を頼、死骸葬送
九〇	入札ニ被仰付、右両品共ニ代銀受取	一二三	仕候、則両寺 <small>ハ</small> 証文被遣受取申候、
九一	申候	一二四	万端願之通被仰付、難有次第第二奉
九二	一、綱・碇、帆 <small>(柱敷)</small> ノ折レ、筒木ハ、矢尾村宿主	一二五	存候、此外何之御断も無御座候間、
九三	与五郎殿方ニ預ケ置申度 <small>与</small> 奉願候へハ、	一二六	御浦状被遣被下候様ニ奉願候、以上

一七一 泉嘉湊浦松屋善三郎舟水主  
 治右衛門（墨線で爪印を象る）  
 一七八 同断  
 享保十年巳八月十二日 喜太郎（墨線で爪印を象る）  
 一八九 同断  
 又三郎（墨線で爪印を象る）  
 二二〇 大庄屋  
 岡田重太夫殿  
 二二一 津井村  
 庄屋次郎兵衛殿  
 二二三 年寄九兵衛殿  
 二二三 積高米貳千貳百俵余、小豆百俵之由、但米三升三斗、入之由、自分買米、  
 一、濡米九百七拾七俵 海中より取揚申候  
 二二四 内九拾七俵七步 御法之通十歩一在所江遣ス  
 二二五 残八百七拾九俵三歩  
 二二六 代銀壹貫九百三拾四匁四分六厘 但俵二付貳分宛  
 二二七 此分水主三人より払米入札二願申候二付、商人集  
 二二八 入札二申付、高札二落、代銀取立相渡ス  
 二二九 指引 米千貳百貳拾三俵  
 小豆百俵 此分海中江捨りと相見へ申候  
 一三〇 一、鉄碇六頭 矢尾村与五郎方二預ケ置  
 一三一 一、加賀芋綱貳房 右同断  
 一三二 一、同綱壹房半 右同断  
 一三三 但切く二面有之  
 一三四 一、槓帆柱折レ三口 右同断

一三五 本口五尋四尺  
 但 中口長七尋三尺  
 末口長貳尋二尺  
 一三六 一、檜筒木壹本 右同断  
 一三七 但立あげ共  
 一三八 一、舟滓 但 梶壹羽損シ申候、折レ桁壹本、床壹本、瓦ノ折レ  
 其外細々舟滓不残  
 一三九 代銀百拾壹匁五分三厘  
 一四〇 内五匁五分七厘 御法之通在所へ廿歩一遣ス  
 一四一 残百五匁九分六厘  
 一四二 一、苧物・茵之切レ色々  
 一四三 代銀九拾七匁五分  
 一四四 銀貳貫百三拾七匁九分貳厘 水主 喜太郎 江渡ス  
 又三郎  
 一四五 右者泉州湊浦善三郎舟、沖船頭庄右衛門、水主・  
 一四六 喝食共二拾三人乗、今度出羽国秋田湊江乗り  
 一四七 下り、自分買米・小豆積登り候処、当月三日  
 一四八 大風二津井村たつき浦二面破損、船頭・水主  
 一四九 拾三人之内、沖船頭庄右衛門、臚取七郎兵衛・忠五郎、  
 一五〇 水主八兵衛・助太郎・市右衛門・権太良・庄七・久兵衛、  
 一五一 喝食金太、以上拾人相果、次右衛門・喜太郎・又三郎  
 一五二 三人、たつき浦浜江打被揚助り候由二面、  
 一五三 同日七つ時二津井村庄屋・年寄方江注進被

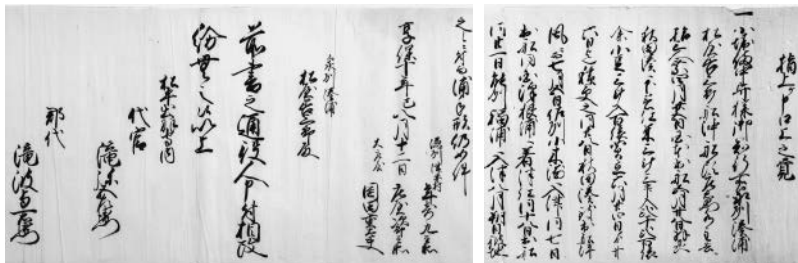
一五四 申候ニ付、早速村方人夫召連、庄屋・年寄  
一五五 罷出、相果候拾人之人々、若陸<sup>江上</sup>り怪我  
一五六 杯致シ被居候哉、又ハ死骸等も打揚ケ候哉と  
一五七 吟味致シ候ヘ共、死骸も揚り不申候、尤本船も  
一五八 打みだけ、舟具等浮キ流レ相見<sup>江候</sup>ヘ共、及  
一五九 暮大波<sup>ニ而中々</sup>磯際<sup>江</sup>寄付不申候、依之  
一六〇 破損場ニ番人大勢稠敷申付置候<sup>而</sup>、矢尾  
一六一 村御役所<sup>江</sup>及注進、役人罷出、破損之  
一六二 様子相尋、船往来・積荷送状取上り候哉と  
一六三 相尋候所、裸<sup>ニ而波ニ</sup>被打揚候仕合<sup>ニ而候</sup>ヘ者、  
一六四 往来手形取上り不申由、積荷状之儀<sup>者</sup>、  
一六五 自分荷物<sup>ニ而候間所持不仕旨</sup>、米積高ハ  
一六六 三人之水主任口上書記申候、段々破損  
一六七 之様子致吟味候所、別紙口上書之通<sup>ニ</sup>  
一六八 御座候、依之沈米・舟具等早速津井村并  
一六九 近村<sup>江</sup>大勢人夫申付、右之通取揚させ申候、  
一七〇 濡米之儀、近村商人集入札ニ申付、高  
一七一 札ニ落、船滓も入札ニ申付、右両品代銀、  
一七二 助り候三人之水主<sup>江</sup>相渡シ申候、綱・碇、帆  
一七三 柱之折レ、筒木ハ矢尾村宿主与五郎<sup>江</sup>  
一七四 預ケ申度旨願被申候ニ付、任願候、且又相果候  
一七五 拾人之死骸、在所并近村共数日相尋  
一七六 候所、当月九日迄二八人之死骸ハ取揚ケ、

一七七 久兵衛・金太死骸ハ上り不申候、右八人  
一七八 揚り候死骸之内、船頭庄右衛門、臚取忠五郎、  
一七九 水主助太郎・市右衛門、真宗<sup>ニ而</sup>御座候間、矢尾  
一八〇 村真宗蓮光寺<sup>ニ而結縁頼葬申度旨</sup>、  
一八一 臚取七郎兵衛、水主八兵衛・権太郎・庄七儀<sup>者</sup>  
一八二 浄土宗<sup>ニ而</sup>御座候ニ付、目貫村浄土宗善立寺<sup>ニ而</sup>  
一八三 結縁頼申度旨願書指出シ被申候間、任願  
一八四 右両寺<sup>ニ而結縁被致候</sup>、海上積荷之様子ハ  
一八五 不存候ヘ共、当月三日大風ニ付、舟破損之段  
一八六 紛無之候、尤三人之水主中今一札被指出  
一八七 之候ニ付<sup>而</sup>、浦手形仍如件  
一八八 隠州津井村  
年寄九兵衛  
一八九 享保十年巳八月十二日 庄屋次郎兵衛  
一九〇 大庄屋 岡田重太夫  
一九一 泉州湊浦 松屋善三郎殿  
一九二 前書之通、役人申付相改、  
一九三 紛無之候、以上  
一九四 松平出羽守内 代官 滝 弥五左衛門  
郡代 滝波与一右衛門  
一九五



【表1】享保10年松屋善三郎船遭難・救助の経緯

月 日	事 項	行番号
4月25日	松屋善三郎の船が和泉国湊浦から出航する（沖船頭庄右衛門、13人乗り）。	2～11 145～147
5月28日	出羽国秋田湊に到着。	
6月24～26日	米3斗3升入り2200俵・小豆3斗入り100俵を買い付け、積み込む。	
6月28日	秋田湊を出船。	
7月5日	佐渡国小木浦に入津する（風のため遅延）。	
7月7日	小木浦を出船、同国沢根浦に到着する。	
7月18日	沢根浦を出船。	
7月21日	能登国福浦へ入津。	
8月1日	福浦を出船、順調に帆走する。	11～40 147～152
8月3日	朝から東南の風になり、隠岐島の山が近くに迫る。 昼頃から激しい大南風で操船が困難となり、米刎を行って喫水を上げる。 島後西郷湾の矢尾村湊へ入津しようと、開き走りで湊口へ進んだところ、舵の尻掛け縄が切れて舵が流出。すぐさま帆を降ろし、船首を風上に向けて尻走りにしようと格闘するうち、磯近くで座礁しそうになったため、津井村の外浦、立木の西方鼻脇に2番・3番鉄碇を投げ込む。 船は大風・大波に翻弄され、浅瀬で船底を痛めて浸水。このままでは岸壁に衝突するため、橋舟で立木浦の浜へ行くことを決め、13人全員が橋舟に乗り移る。そして、頃合いを見計らって碇の手綱を断ち切り、櫂で浜の方へ漕ぎ寄せる。ところが大波が来て橋舟が転覆。皆は船底の航に取りつくか、続く大波に打ちまわられて、13人のうち船頭・鰭取を含む10人は波間に消え、水主の治右衛門・喜太郎・又三郎だけが浜に打ち上げられて助かる。 本船は磯へ打ち上げられ破船となる。 7つ頃、治右衛門ら3人は津井村の在所へ行き、庄屋・年寄に難破を知らせる。着物を借り、介抱を受けて、村役・村人と共に破船場へ急行。不明の10人は怪我人・死骸とも発見できず。 夕暮れとなり、波が強く磯際へ近付けず、船具などの回収は不能。現場に番人を置いて見張る一方、矢尾村の代官所へ難破を注進する。	
8月3～12日の間	代官所から役人が取り調べに出張。治右衛門らから破船の状況、および船往来手形・積荷状の有無を聞いた。 * 船往来手形：裸で波に打ち上げられたので携帯できず。 * 積荷状：米・小豆は自分買いの荷物のため、もとより所持せず。	41～55 153～161
	津井村と近村から大勢出て、漂流の船具を回収、海中に沈んだ米も970俵余りを引き上げる。 喜太郎の柳行李が1つ揚がり、中の衣類を水主3人で着ることにする。それ以外の衣類・身の回り品は揚がらず。夜間の窃盗行為はなく、潮に流されたもよう。在所の対応は申し分なし。	55～83 161～169
	濡れ米につき、3人は現地で売り払うことを願い、入札になる。 * 海中から引き揚げられた濡れ米：977俵 内 97俵7歩：定法として10分の1を在所へ渡す。 残り 879俵3歩：落札価格1貫934匁4分6厘（1俵につき銀2匁2分） * 残りの米1223俵・小豆100俵は回収不能、海中へ捨て置く。 船滓（破損した舵や帆桁などの部材・船具）も入札するよう仰せ付けられる。 * 船滓一切：落札価格11匁5分3厘 内 定法として20分の1（5匁5分7厘）を在所へ渡す。差引105匁9分6厘 * 船滓以外の麻製品・敷物の切れ：落札価格97匁5分 水主3人は代銀計2貫137匁9分2厘を受け取る。	84～91 123～129 138～144 170～172
	切れ切れの加賀亭網・鉄碇6頭・3つに折れた帆柱・櫓の筒木は、矢尾村宿主の与五郎方へ預けおくことを願い、そのようになる。	92～95 130～137 172～174
	溺死者の搜索は在所の者に委ねられ、8月9日までに8人の死骸が揚がる。残る2人（久兵衛・金太）は近村にも尋ねさせたが、沖に流されたのか発見できず。 死者8人は、それぞれの宗旨によって当地の寺に結縁を頼み、葬ることが聞き届けられる。水主3人は仲間の葬儀を行い、寺からの証文を受け取る。 * 浄土真宗 矢尾村蓮光寺：船頭庄右衛門、鰭取忠五郎、水主助太郎・市右衛門を埋葬 * 浄土宗 目貫村善立寺：鰭取七郎兵衛、水主八兵衛・権太郎・庄七を埋葬	96～122 174～195
	治右衛門ら3人の願いはすべて聞き届けられ、この他にこたわておくこともないので、津井村へ一札を差し出し、浦手形の発行を求める。	
8月12日	津井村の庄屋次郎兵衛・年寄九兵衛・大庄屋岡田重太郎が、船主の松屋善三郎宛に浦手形を作成し、松江藩代官滝弥五左衛門・郡代滝波与一右衛門が奥書認証を行う。	



【写真】  
松屋善三郎船  
遭難の浦手形  
（冒頭・末尾）

浦手形の翻刻内容を整理し、松屋善三郎船の国元出航から始めて、隠岐での遭難、その救助・搜索と事後の処理にいたる一連の流れを、時系列で示したものが【表1】である。ただし、遭難以後、浦手形の発給までの一〇日間については、もとより日ごとの記述になっていないので、事項ごとにまとめて列記することにした。また、本稿中に「」で表した数字は、翻刻文の行番号である。

## 二 遭難の顛末と浦手形

### 1 浦手形と幕府法令

周囲を海に囲まれた日本では、江戸時代初期から幕府や沿岸諸藩によって海難救助に関する法整備が積極的に進められた。すなわち幕府法では、元和七年（一六二一）八月、寛永一三年（一六三六）八月、慶安五年（一六五二）八月、寛文七年（一六六七）閏二月、延宝八年（一六八〇）九月（再交付）、正徳元年（一七一二）五月（再交付）、正徳二年八月（添高札）の公布が確認されている。<sup>③</sup>このうち、寛永一三年時に発令された三か条、(1)難船時における沿海諸浦の救助義務、(2)積荷回収への報酬基準、(3)刎荷（打荷ともいう。積荷の海中投棄）に対する厳正な調査が、以後の海難救助法においても骨子となる。浦手形は、その第三条が発給の法的根拠で、刎荷を行った場合、その船が着いた湊で代官の下役や庄屋が立ち会って詳しく調査し、船に残る荷物を書き上げ、証文を作成する。刎荷が船や乗組員を救うため、やむにやまれぬ行為であったこと、積荷を詐取する目的で、海難事故が乗組員や彼らと結託した沿岸

民によって故意に起こされたものでないことを証明したものである。

もつとも、浦手形は刎荷だけを対象とするわけではない。船の破損・浸水・座礁・漂流・沈没などにも対応し、船および積荷への損害が荒天などの不可抗力によるものか、乗組員の故意・過失によるものかを、類船など周囲の状況も合わせて取り調べ、それによって船方の正当性が証明されれば、船頭は船主・荷主に対しての賠償責任を免れることができたのである。あわせて、船・乗組員・積荷の救助・保全、および事後処理を担当した浦方においても、適切にその義務を履行し、その過程で不正行為がなかったかを確認しなければならなかった。

浦手形の形式は複数のパターンがあるが、内容・効果は同じである。<sup>⑤</sup>本史料の場合、船方と浦方のやり取りで構成されるが、船方は難破を生じ延びた水主三名、浦方は救難処理に当った隠岐国周吉郡津井村（現、島根県隠岐の島町飯田津の井）の庄屋・年寄と、周吉郡を管轄する大庄屋である。<sup>⑥</sup>最初に、船方から浦方に宛てた口上書（一一二二）で、出港から海難の全容、および浦方による救難活動・事後処理をすべて述べ、「少<sup>茂</sup>对在所之衆へ申分無御坐候、諸事明白成ル被成方、段々御世話ニ罷成、辱奉存候」（八〇〇八三）と、浦方の対応が万全であったことを明言する。ついで、浦方が積荷の損害とその処理の詳細を書き上げ（一二三三四）、その後に船方の口上書と同様、海難の状況と救護・事後処理について要記し、船方からの一札を得て問題がないので、船主である湊浦の松屋善三郎宛に浦手形を発給する（二四五九二）。ただし、浦方の記述中、積荷や海難の状況は船方の言い分に基くので、「米積高八三人之水主任口上書記申候」（二六五〇六六）、「海上積荷之様子ハ不存候へ共、当月三日大



風二付、舟破損之段紛無之候」(二八四～八六)とことわり、伝聞と実見とを明確に区別していることが注目される。最後には、監督者である隠岐国の代官と上官の郡代<sup>⑦</sup>が、内容に誤りがないことを奥書認証する(一九二～九五)。本史料の原本には、両者の印が押されていたはずである。この奥書(あるいは裏書)認証によって、浦手形は法的効力を持つのである。和泉国湊浦廻船の海難事故を処理した浦手形は、津田秀夫文庫中の本史料に加え、湊浦を含む地域の代官を務めた中庄新川家伝来の古文書約二九〇〇点の中にも、宝永から明和にかけてのものが六点含まれている。このほかにも今日失われた浦手形があるかもしれないが、現存するものの一覧を【表2】に掲げた<sup>⑧</sup>。これによると、太平洋岸での事故が多い。すなわち1・4・6・7は、海難の多発地帯である熊野灘から遠州灘にかけての海域で発生しており、とくに1・4は、冬季の北西季節風の大荒れである「大西風」<sup>⑨</sup>によって黒潮の流れを突破し、八丈島まで漂流した典型的なケースであった<sup>⑩</sup>。それらに対して本史料は、唯一日本海での事故を扱っており、あわせて北国航路での湊浦廻船活動の一端を物語っているのである。

なお、海難事故といっても、軽微なものについては浦手形が作成されない。例えば、安永六年(一七七七)八月二八日に、湊浦の南方約七キロメートルの所にある和泉国日根郡樽井浦(現、大阪府泉南市樽井)の小型廻船が、薩摩芋と煎り雑魚を運賃積みで上方へ運ぶ途中、強い北風で湊浦に吹き寄せられたことがあった<sup>⑪</sup>。湊浦からは人足が出て、船や船具・積荷を浜へ引き揚げ、現場には番人を置いて見張らせ、乗組員や荷主を介抱した。船の損傷は少なかったので修理を行い、荷積みして乗り

【表2】和泉国湊浦廻船に関する浦手形

No	浦手形 作成年月日	浦手形 作成地	船主名 〔船頭名〕	船の規模	海 難 の 状 況
1	宝永2年 (1705) 6月9日	伊豆国 八丈島	源次郎 〔船主本人〕	11人乗	宝永元年11月11日江戸川へ入津、荷物を売り帰路につく。熊野大島を12月24日出船後、戊亥風で沖に流される。翌年1月1日青ヶ島が見え、本船を捨て橋舟で翌日上陸。橋舟を修理し、5月12日八丈島へ出発、同日大岡郷浦に着く。
2	享保7年 (1722) 1月24日	肥前国 (面高浦)	松右衛門 〔船主本人〕	16端帆 12人乗	米1569俵を積載し、1月11日肥前面高浦に入津。翌12日出船したところ、南風が強く浦口で座礁し、水船となる。
3	享保10年 (1725) 8月12日	隠岐国 津井村	松屋善三郎 〔庄右衛門〕	13人乗	享保10年4月25日国元出航、出羽秋田湊で米2200俵・大豆100俵を買入れ帰路につく。能登福浦出船後に辰巳風・大南風に逢い、8月3日隠岐島後の立木浦で破船、死者8名・行方不明者2名。
4	延享3年 (1746) 3月	伊豆国 八丈島	吉兵衛 〔伝左衛門〕	13人乗	延享2年10月27日国元出航、肥前平戸で塩桶を買ひ積み後、江戸へ向け、瀬戸内海を通り紀伊水道から外洋に出る。閏12月5日大山沖(渥美半島沖)で戊亥風に吹き流され、刳荷、帆柱切倒し、髪を払って諸神に祈る。同7日八丈島が見え、本船を捨て橋舟で三根浦へ至る。
5	宝暦12年 (1762) 2月27日 (奥書は同28日)	和泉国 岸和田浦	市次郎 〔船主本人〕	8端帆 5人乗 (120石積)	宝暦11年11月3日国元出航、12月3日下関に着船、加賀米229俵を買ひ積み帰路につく。翌年2月22日岸和田に着船、米100俵を売る。残りは貝塚で売り払うつもりだったが、西風強く碇綱が切れ、岸和田浦へ打ち寄せられる。
6	宝暦14年 (1764) 1月	志摩国 神島村	平松九左衛門 〔長次郎〕	13人乗	国元出航後、宝暦13年11月晦日(29日)相模浦賀へ入津、商売を終え空船にて帰路につく。12月22日夜、東風と大雨により神島村荒磯で破船、死者3名・行方不明者9名。
7	明和9年 (1772) 7月	志摩国 甲賀村	義兵衛* 〔船主本人〕	8人乗	国元で米を買ひ積みして明和9年6月19日出航、南下して外洋へ出る。7月3日夜遠江片浜辺で東風と雨に逢ひ引き返したところ、甲賀村沖の荒磯で破船し、翌未明橋舟で脱出。

\*端裏書では船主を(平松)九左衛門としており、義兵衛は沖船頭であつたらしい。

帰ることにし、翌日には湊浦に対して、事故の概要と適切な対応への謝意を表した一札を認めている。この事案は、近くの浦どうしのことであり、損害がわずかだったこと、荷主も乗り合わせていて事情を納得していたことから、内々で済ませたものであろう。浦手形を作るとなると、事務が煩雑になり、時間がかかったと思われる。

それではつぎに、大きな海難事故となった松屋善三郎船の遭難の状況を見てみよう。

## 2 松屋善三郎船とその遭難

松屋善三郎の持ち船は、一八世紀初期以降、国内海運の主役となった弁才船<sup>べんさいせん</sup>であることは疑いない。乗組員は沖船頭（雇船頭）の庄右衛門以下、艫取<sup>ともとり</sup>（舵取）の七郎兵衛・忠五郎、水主の八兵衛・助太郎・市右衛門・権太郎・庄七・久兵衛・治右衛門<sup>⑮</sup>・喜太郎・又三郎、喝食<sup>かしき</sup>（炊）の金太で、一三人乗りである。船の規模を表す指標としては、ほかに積石数（積載できる米穀の体積であるが、実際にはその重量を意味する）と帆の端数がある。本船は、計算すると秋田湊で米七二六石と大豆三〇石を買い積みしており、積石数は七〇〇〜七五〇石と推定される。重量比にして大豆は玄米より二割程度軽いこと、商売上、利益優先で多めに積載している可能性があることなどを勘考すると、積石数にはある程度の幅が生じざるをえない。これに対応する帆端数は、帆のタイプによって二種類あり、一八〜一九端帆、あるいは二二〜二三端帆である<sup>⑯</sup>。

近世、鎖国下の木造船は、遠洋航海に適する技術的発達は遅れたが、沿岸・近海航行に限られた日本の実情に合わせ、利便性と耐航性を向上

させる工夫が行われていた。航<sup>かわら</sup>と呼ばれる平たい船底材は西洋船の竜骨に相当するが、分厚く頑丈な造りで、砂浜にそのまま着底させることができた。しかし、船体は、航の両側に外板となる複数の棚板を上下に縫い釘で繋ぐ構造で、要所に梁で補強されたものの、西洋船が持つ肋骨がなく、ひずみに対して脆弱であった。また、船底よりも下がる大きな舵は、浅瀬で引き上げる仕組みになっており、船尾の床船梁に尻掛け縄で括り付けられただけである。水密甲板もなく、海上で荒天に遭遇すると文字通り「板子一枚下は地獄」で、海難事故は後を絶たなかった。浦手形が残れば事故のようすが判明するが、嵐で沖に流され、何の痕跡も残さず、海の藻屑と消えたケースも多かったと想像される。弁才船の弱点は、不安定に取り付けられた舵と、それを囲うように船尾に設けられた外艫<sup>そとしほ</sup>とされ、これらの破損が難破を招いた。

松屋善三郎の廻船の場合、秋田湊を出てから佐渡国小木浦・沢根浦（現、新潟県佐渡市小木町・沢根町）、能登国福浦<sup>ふくら</sup>（現、石川県羽咋郡志賀町）を経て隠岐に向かっている【図1】。能登を出て二日後の八月三日（新暦では九月九日）、東南風、ついで大南風<sup>おほみなみ</sup>によって島後に吹き寄せられ、西郷湾の矢尾村湊<sup>やび</sup>へ入る手前で、金峯山<sup>きんぷせん</sup>のある東の岬を回り切れず、津井村の外浦である立木浦で破船したのである【図2】。この間、積荷の米俵を刎ね捨てて船足を軽くし、帆の下部を引き絞って開き走り（横風帆走）につとめ、湾の入り口に近づいていったが、思いがけなく尻掛け綱が擦り切れて、舵が流出してしまった。この船も難破の直接原因は舵にあった。

舵を失った船は流体力学上、真横から風を受けるようになり、横波に



【図1】浦手形に見る松屋善三郎船の航路  
(復路のみ、往路の寄港地は不明)

よって海水が容赦なく打ち込んでくる。さらに帆柱の横揺れで外板に荷重がかかり、破口が生じる<sup>⑬</sup>。そのため、すぐに帆を降ろして船首を風上に向け、尻走り（後ずさり）しなければならぬが、思うように操船できず、悪戦苦闘するうちに座礁しそうになった。そこで、鉄碇六頭のうち二番・三番碇に加賀芋綱を取り付けて、立木浦西方の鼻脇（吹上崎と思われる）に投げ入れ、船が流されるのを止めようとした。

このあたりの島の地形は流紋岩や玄武岩の溶岩台地で、浸食が激しく海崖が発達している<sup>⑭</sup>。その下の立木浦は水深二尋から六尋（三・六～一

〇・九メートル）の岩礁地帯となっていて、若布・海苔・鮑・栄螺・荒若布<sup>あらのふ</sup>が多く、湾の入り口近くには千畳敷と呼ばれる浅瀬もある。船は強風と荒波に揉まれて船底を痛め、浸水して沈みかけた。乗組員たちは、このままでは岩壁に衝突するので、橋舟（端舟、伝馬、舢舨）



【図2】隠岐国島後海難関係地図（×は推定破船場所）

下図は「五万分一地形図」（大正元年測図・昭和九年修正測図、陸軍参謀本部）を加工。  
(<https://purl.stanford.edu/jv432cw8456>)



で立木浦の浜（塩浜と思われる）へ行けば命が助かるだろうと相談し、一三人全員が船首近くに置いてある橋舟に乗り移った。橋舟は、帆柱を支える筒木に結ばれた碇の手綱に押さえつけられていたが、波で橋舟が浮き上がる頃合いを見計らい、手綱を一気に断ち切り、櫂で浜のほうへ漕ぎ寄せた。ところが大波が押し寄せて、橋舟は転覆。彼らは船底の航にしがみついたが、次々襲いかかる大波にさらわれ、船頭と艀取二人を含む一〇人が沈んで見えなくなった。結局、立木浦の浜へ打ち上げられて命拾いしたのは、水主の治右衛門・喜太郎・又三郎の三人だけであり、船はそのまま荒磯で碎けてしまった。以上が、松屋善三郎船の海難事故の全容である。

### 3 浦方の海難救護と事後処理

ついで、浦方、立木浦を擁する津井村が行った救難処理の具体的な内容について、見てみよう。津井村の在所は、立木浦と反対側、西郷の東湾に面する。立木浦からは岬を越えて八町（約九〇〇メートル）ほどの距離という。九死に一生を得た治右衛門ら三人は、同日七つ頃（午後四時頃）にこの道を通って在所へたどり着き、庄屋・年寄に難破を知らせた。報を受けた村では、(1)三人に着物を貸し与えて介抱をし、(2)庄屋・年寄が村人を引き連れ、三人と共に破船場へ急行して不明の一〇人を捜索、(3)船具などは日没と高波で回収できないため、現場に番人を大勢置いて見張ることにし、(4)矢尾村にある代官所へ難破を注進した。この四点が難破当日の浦方の自主的な対応である。

代官所からは役人らが出張し、生存者三人に対して取り調べが行われ

た。その内容は、(1)破船状況についての究明と、(2)廻船活動における必要書類の確認である。(2)の書類には船往來手形と積荷状（積荷送り状）がある。往來手形は、湊浦を支配している近江国小室藩の代官新川五左衛門が各地の船番所に宛てた通航証明書で、船上では箱に入れて大切に保管され、緊急時には持ち出すべき最重要書類である<sup>28</sup>。だが、三人は裸で波に打ち上げられたので携帯できなかった。また、積荷送り状については、米・小豆が他者の荷物ではなく、自前で購入した積荷であるため、もとより所持していない旨を答えている。

代官所からの出張があった時点で、海難の救護処理の監督者は代官となり、以後は代官の指示に従って活動することとなった。その内容は、(1)海上に漂う船具等の回収と海中に沈んだ米俵の引き揚げ、(2)治右衛門ら三人に対する救護・援助、(3)濡れ米および回収船具等の取り扱い、(4)遺体の収容と埋葬である。

(1)については、浦方の津井村は小村なので近村からも人が集められており、広い海上を手分けして浮遊物の回収に当たったと思われる。海中の米俵も九七七俵が引き揚げられたが、小豆は回収できなかった。乗組員の身の回り品は喜太郎の柳行李が一つ揚がっただけであり、船の残滓も多くないことから、監督者側は、夜間の窃盗や回収品の隠匿などがないよう、村人たちに対しても厳しく目を光らせていた。

(2)については、引き続き浦方へ三人の介抱、要望への対応などの要請があり、三人は、在所の衆の対応は非の打ちどころがなく、いろいろ世話になったことを感謝している。

(3)のうち濡れ米については、代官から三人に、どうするかお尋ねがあ

った。米俵は海底で大波に揺られて痛みがひどいというえ、数多くの俵を干し上げて回収するのも困難である。そこで、現地での売り払いを希望したところ、願いが聞き届けられ、近村の商人が集まって入札の運びとなった。加えて、船の残滓についても入札に付すように命じられた。

近世の海難救助法では、前述のように基本三か条の二つ目に、積荷回収を行った浦方への報酬基準である「歩<sup>ふ</sup>二」を定めている。回収の難易度によって差があり、海上の浮荷物は二〇歩一（二〇分の一）、沈荷物は一〇歩一（一〇分の一）を差し出すことになっていた。これは現物でもよいし、価格を算定したうえで、金銀で支払ってもよかった。濡れ米九七七俵は海中から引き揚げたので、その一〇分の一に当たる九七俵七歩を津井村へ渡し、入札は残り八七九俵三步に対して行われた。落札価格は一俵につき銀二匁二分の計算で、一貫九三四匁四分六厘であった。一俵三斗三升入りで銀二匁二分は、一石ではわずか約六匁七分である。享保九年十二月の米価が大坂で一石四三匁（広島米）、海難事故のあった翌一〇年十二月は五〇匁三分（同）とやや安値続きではあったが、それでも七分の一ほどの低価格にしかならなかった。残りの米一二三俵と小豆一〇〇俵は結局回収できず、海中へ捨て置くこととなったのである。船滓のほうは、破損した舵や帆桁など一切が銀一一匁五分三厘で落札された。これらは船の部材や船具であって積荷ではないが、なぜか歩一の対象とされている。浮遊物なので二〇分の一の五匁五分七厘を在所に渡すことになり、差引一〇五匁九分六厘となった。また別に、船滓以外の麻製品や敷物の切れなどが九七匁五分で落札されたが、これは歩一の対象になっていない。治右衛門ら三人が受け取った代銀は、総額二貫

一三七匁九分二厘であった。

三人は、本船の貴重な部材・船具であった加賀亭綱、鉄碇六頭、折れた帆柱、檣の筒木について、矢尾村の宿主である与五郎方に預けることを代官に願ひ、許可を得た。これらも歩一の対象外で、破船現場から直接回収したものであろう。破船の確たる証拠であり、再利用できるものもあるので、後日、僚船に載せて船主の元に返すつもりと思われる。

(4)については、浦方に死者の搜索と収容が命じられ、八月九日までに船頭の庄右衛門、艫取の七郎兵衛・忠五郎、水主八兵衛・助太郎・市右衛門・権太郎・庄七の八名の死骸が揚った。残る二人、久兵衛と金太は近村にも尋ねさせたが、発見できなかった。治右衛門らは、死者八名のうち船頭庄右衛門、艫取忠五郎、水主助太郎・市右衛門の宗旨は浄土真宗なので、矢尾村の真宗（大谷派）蓮光寺で、また、艫取七郎兵衛、水主八兵衛・権太郎・庄七は浄土宗なので、目貫<sup>めくさ</sup>村の浄土宗善立寺に、それぞれ結縁を頼んで葬りたいと願ったところ、その通り許可された。そこで、三人は両寺に頼んで死者の葬儀を行い、両寺より埋葬済みの証文も受け取った。故人の宗旨によって現地で結縁を頼み、葬儀を営むことは理想であろうが、海難事故が起こった場所によっては、必ずしも希望通りにはいかなかったようである。

さて、治右衛門ら三人は、願いがすべて聞き届けられ、他に何も申し述べることはないの、浦方へ浦手形の発行を求めた。それに対して、津井村の庄屋次郎兵衛・年寄九兵衛と大庄屋岡田重太郎は、「三人之水主中の一札被指出之候二付」（二八六、八七）、享保一〇年八月二日付で船主の松屋善三郎宛に浦手形を作成している。浦手形発給の条件として、

船方から浦方へ一札を入れる必要があったことが分かる。<sup>⑤</sup>そして最後に、監督者であった出雲国松江藩の代官滝弥五左衛門と郡代滝波与一右衛門が奥書認証を行ったのである。

こうして、松屋善三郎船の海難事故は不可抗力であったことが証明され、救難処理を担当した津井村も十分責務を果たしたことが確認された。だが、船主してみれば、建造からおそらく数年しか経っていない七〇〇石積み以上の大型弁才船と、それに満載されていた積荷、そして秋田湊での商取引を一任し、信頼を寄せていた沖船頭以下、船乗りを一〇人も失ったのである。その損害は計り知れなかったであろう。

### 三 和泉国湊浦の廻船業と松屋善三郎

#### 1 湊浦と廻船業の消長

松屋善三郎船が所属した和泉国湊浦は、日根郡中庄村を構成する三集落、上出村・湊村・田出村（湊村の枝郷）のうち、大阪湾に面した湊村の海岸地域を指す呼称である。湊村の石高は二二三一石三斗で、その領域は、北に佐野川（湊川とも記す）があつて瓦屋村との境をなし、南は田出村から海へ通じる塩汲道を挟んで、佐野村領に接していた。佐野村の沿岸部は佐野浦であつて、湊浦と地続きである。湊村の集落から波打ち際までは幅三〇間（約五四メートル）内外の浜が広がり、その中央部には浜高札がたてられていた。<sup>⑥</sup>遠浅の海岸で、波打ち際から沖二〇町（約二・二キロメートル）ほどは砂地、その先は泥底であつた。<sup>⑦</sup>近世に佐野浦の風景を鳥瞰図的に描いた「佐野八景図」によると、同浦には栈橋のよ

うな接岸のための港湾設備は見えない。帆船を沖に停泊させて橋舟で瀬取りしていたようなので、北接する湊浦も同様の景観であつたと考えられる。

湊村を含む中庄村は、全村が天明八年（一七八八）まで小室藩小堀家の飛地で、同年六月に小堀家が改易となり廃藩してからは、幕府領となつて明治維新まで続いた。湊浦は、岸和田藩領の鶴原浦と佐野浦の間にあつて、近世初期には小浦のため、佐野浦に浦役銀代わりの年中入用銀を支払つて従属し、廻船活動を行っていたが、元禄初年頃から自立する動きを見せる。湊村は浦方の権利をめぐる争論で佐野村に勝訴し、元禄九年（一六九六）頃に「湊浦」の名を確立したという。<sup>⑧</sup>

湊浦の廻船業は、寛文から延宝にかけて「新屋」という業者が数艘の船を所有し、買い積みを中心とする遠隔地商業を展開していたことが明らかにされている。<sup>⑨</sup>九州米を購入して堺・大坂で販売、ついで東海・関東に販路を拡大し、寛文一二年（一六七二）に西廻り航路が開かれてからは、北国に赴き秋田米の買い付け（延宝二一・一六七四年の二例）も行っていた。そのほか、関東の干鰯、上方の木綿・菜種、瀬戸内の塩も手掛け、効率よくこれらの商品を流通させていた。湊浦の独立が彼らの商業的成功を背景としたものであることは、言うまでもないであろう。

その後の湊浦廻船業の一端を示す史料としては、廻船数を示した二点の文書がある。子年四月二八日付の「泉州日根郡湊浦廻船之覚」<sup>⑩</sup>と寅年一二月八日付の「乍恐口上書」<sup>⑪</sup>で、ともに湊浦から奉行宛である。前者は船主二三名による船四二艘（三〇〇〇六五〇石）の所有状況が書き上げられ【表3】、北国・西国・江戸で廻船活動をしている旨の記載があ



【表3】子年（享保5年）4月湊浦廻船所有状況

船主名	所有船の積石数別船数							総積石数	推定屋号
	650	600	550	500	400	350	300		
善 六		4		1				2900石	
嘉 兵 衛		4						2400石	新屋
善 三 郎		3						1800石	松屋
善 五 郎			3					1650石	
六郎左衛門	2							1300石	
徳 左 衛 門		2						1200石	新屋
伝 介		2						1200石	
吉 兵 衛		2						1200石	松屋
権 十 郎		2						1200石	新屋
清 右 衛 門				2				1000石	新屋
与次右衛門				2				1000石	
長 右 衛 門				2				1000石	新屋
八郎右衛門	1							650石	
八 郎 兵 衛	1							650石	新屋
治 右 衛 門		1						600石	新屋
忠 左 衛 門		1						600石	新屋
庄 九 郎		1						600石	
六 郎 兵 衛			1					550石	
了 受				1				500石	
市郎左衛門					1			400石	
五郎右衛門					1			400石	水間（屋）
弥 五 兵 衛						1		350石	
三郎右衛門							1	300石	

る。後者は船舶総数のみで、廻船四〇艘（三〇〇～六〇〇石）・小廻船（三〇石・四〇石）二艘とあり、大坂での物資輸送について記述する。これらの史料につき、先行研究では、前者の子年は宝永五年（一七〇八）か享保五年（一七二〇）、後者の寅年は元禄一二年（一六九八）か宝永七年と推定している。

両文書の差出人に名前のある庄屋八郎右衛門は新川姓の人物で、少なくとも史料的には元禄三年から享保六年まで登場するが、ここで注目すべきは、両文書に見える湊浦に添えられた「小堀備中守殿領内」の表記である。その時期の小室藩主は小堀政恒（元禄七年まで）・政房（正徳三

「一七一三年まで）・政峯の三代で、このうち備中守に任官したのは政峯一人であり、正徳三年一二月から享保一九年一〇月までである。そして、庄屋八郎右衛門の登場期間と政峯の越中守在任期間を重ね合わせると、子年は享保五年だけ、寅年の該当はないが、享保七年の可能性が大きいと思われる。両文書の船数が同じであること、小廻船を除いた積石数の幅が近いことから、両史料は年代的にあまり離れていない印象を受けるのである。

いずれにせよ、享保前期には湊浦に約四〇艘の廻船があったことになり、北国・西国・江戸・大坂で活動していたことが判明する。とくに、六〇〇石積み以上の大型廻船が全体の半数以上を占めているので、延宝期から引き続き、松屋善三郎のように、出羽方面に米の買い付けに向かう船が増加していたのではないだろうか。少し時代は下るが、延享四年（一七四七）四月には、新屋長右衛門の廻船も秋田湊に赴いている<sup>⑤</sup>。一八世紀前半、大型船を所有している湊浦の船主たちは西廻り航路に力を注ぎ、しのぎを削っていたようである。

享保期を中心とする近世前期の日本海海運は、幕府・諸藩の廻米など領主的商品流通機構を背景に、上方・瀬戸内を中心とする廻船業者の独占状態であり、和泉国では元禄一二年（一六九九）の段階で六〇〇石から七〇〇石積み七艘を含む二〇五艘の廻船を持つ佐野浦と、それに続く貝塚浦・湊浦の活動が目覚ましかった。日本海を廻る北国航路は、冬季には気象条件の悪化で九月から翌年の三月にかけて通船できず、年一往復の航海である<sup>⑥</sup>。それでも、船体の大型化と耐航性の向上によって、弁才船は帆走専用となり、本州沿岸を停泊しながら廻る地乗りから、島や

山など所どころ目印を確認しながら沖合を一気に走る沖乗りへと移り変わり、航海日数の短縮・大量物資の輸送・乗組員の削減といった海運の合理化が北国廻船繁栄の基礎となった。松屋善三郎船の場合、秋田湊への往路での寄港地は不明だが、国元からは重石（バラスト）だけ積んだ空船か、重石の替わりに重量のある商品を少々積んだ半荷の状態を下り、米穀の買い積みが終われば、荒天時の退避と風待ち以外、寄港を最小限にし、佐渡・能登・隠岐をつなぐコース<sup>④</sup>で下関を経て上方方面に戻り、さらには関東にまで輸送・販売していた可能性がある。

しかし、このような大型船による活動は、長く続かなかった。一八世紀後半に入ると、船主は新屋一統（里井家・中家・新谷家など）と平松九左衛門に限られ、廻船の積石数も一〇〇石から四〇〇石と小型化する傾向が見られるという。船数も減少するなか、田舎廻船を主流に活動していたが、天明八年（一七八八）にはすでに、湊浦に一艘の廻船もないありさまとなっていた<sup>⑤</sup>。その少し前、安永期には斜陽を迎え、「不繁昌」の景況だったことが指摘されており、実にあつけない終焉であった。この状況は湊浦だけでなく、それまで日本海海運を担ってきた上方・瀬戸内の他の地域にも見られ、江戸後期には佐野浦の食野家<sup>ゆし</sup>をはじめ、有力船主が次々と逼塞・交替・没落していった<sup>⑥</sup>。そこには、大坂を中心とする商品流通・市場構造の変化と、それに対応した海運業界の新たな動きが考えられるのである。

## 2 湊浦における松屋善三郎の位置付けと松屋一統

湊浦の船主松屋善三郎が登場する史料は、本稿の浦手形のほかに、前

述の子年（享保五年）四月二八日付の「泉州日根郡湊浦廻船之覚」【表3】がある。その中で、六〇〇石積みの廻船三艘を所有する善三郎は、松屋善三郎に違いないであろう。湊浦の船主二三名について所有船の総積石数を求め、物資輸送力を比較すると、計一八〇〇石の善三郎は、六〇〇石船四艘・五〇〇石船一艘で計二九〇〇石になる善六、六〇〇石船四艘で計二四〇〇石の嘉兵衛に次いで、三番目である。湊浦の船主のなかでは、トップクラスの輸送力を持っていたことになる。

では、この六〇〇石積みの船三艘と、隠岐で難破した船とはどのような関係にあるのだろうか。後者を七〇〇〜七五〇石積みと想定したが、六〇〇石船に無理やり七五〇石の米・大豆を積んでいたとは考えられないだろうか。一般に船舶の公称積石数は、実積石数が基本であるが、船体の主要寸法から近似値を求める算出石数も一八世紀以降の弁才船について使われるようになった。そして、時代が下るほど両石数は乖離し、文政期以降、実積石数は算出石数の三割増しから幕末・維新时期では九割増しにもなったという<sup>⑦</sup>。もっとも、享保期ではいまだ実積石数と算出石数にそれほど差はなく、【表3】の積石数も額面通りに受け取ってよさそうである。

そうすると、松屋善三郎は、享保五年から一〇年の間に、新たな大型船を入手したことになる。また、前述の寅年一月二八日付の廻船・小廻船についての口上書を享保七年の成立とすれば、積石数の上限は六〇〇石となっているので、新船の入手時期の範囲はさらに狭まる。これが新造なか中古船の購入なのかは不明だが、標準的な弁才船の耐用年数は約二〇年とされているので、新造とすれば、享保一〇年での破船は丸損

である。廻船は、就航ごとに物資の輸送と商取引を完遂してこそ「宝船」となりえたが、船・積荷・乗組員の大半を失ったこの海難事故は、松屋善三郎に大打撃を与え、逼塞の要因となったことであろう。以後の史料に善三郎は現れない。

船主となった松屋は、善三郎だけではなかった。史料上では松屋の屋号はわずかしは見られないが、最も古いものは元禄三年（一六九〇）二月二日、佐野浦との争論で、湊浦から出された言上書<sup>⑦</sup>の差出人としてである。このときの庄屋は新川八郎左衛門・日根左衛門、年寄は新屋十右衛門・岩田七兵衛、その後に浦人として、新屋二（次）郎兵衛・新屋加（嘉）兵衛・新屋七郎左衛門・松屋吉兵衛・鯛屋徳左衛門の六名が続く。この中の松屋吉兵衛は【表3】の吉兵衛と考えられ、享保五年当時、六〇〇石船を二艘所有していた。

吉兵衛の名はその後、【表2】4に現れる。延享二年（一七四五）末に八丈島へ漂流した廻船の所有者である。通り名が同じなので、これも松屋の可能性が高いが、元禄三年からは五〇年以上隔たっているため、その間に代替わりしているであろう。享保五年からも二〇年経過しており、八丈島近海で乗り捨てられた船は、【表3】の六〇〇石船ではないと思われる。一三人乗りであることからして、松屋善三郎の遭難船と同規模ではないだろうか。冬季に西国で塩鮑を仕入れ、江戸に輸送し販売していたようで、夏場は北国、冬場は西国と、年間を通じて稼働していた可能性がある。延享二年の難破では、幸い乗組員は全員助かったが、船と積荷はすべて失われた。松屋一統にとっては少なくとも二度目の災厄で、手痛い損失であったに違いない。

【表3】には他の史料から判明もしくは推定できる船主の屋号を示したが、不明の者も多い。最大の物資輸送力を誇る善六、五五〇石船三艘を所有する善五郎は、善三郎と同様に善の字が名前に付いており、何らかの関係があるかもしれない。彼らが松屋かどうかは不明であるが、一統である可能性は捨てきれない。

このほかに、【表3】とほぼ同時期の史料として、但馬国今子浦（現、兵庫県美方郡香美町）の入船記録（享保四〇一一年）<sup>⑧</sup>があり、その中に三名の松屋が見える。松屋太右衛門（享保四年五月二三日入津、一一人乗）、松屋徳三郎（同七年五月一七日入津、一一人乗）、松屋六兵衛（同八年五月二日入津、一二人乗）で、いずれも北国廻船の往路での入津である。一一人、一二人乗りは、およそ六〇〇石ないし六五〇石船であろう。この三名は【表3】に現れないので船主ではなく、沖船頭と思われる。善三郎を含めた松屋が所有している六〇〇石級の船に、一統の者が船頭として乗っていたのではないだろうか。

廻船業に関係する松屋の活動は、延享二年末の海難事故以後見られない。天明元年（一七八一）閏五月二四日には松屋勘助が現れ、「近年不仕合打統」き借銀が高んだので、家屋敷を売り払い、妻子を連れて、商売のために大坂に出たい旨の願書を代官新川五左衛門宛に出しており、親類惣代として松屋安右衛門が連印している<sup>⑨</sup>。このときすでに、「一類共<sup>⑩</sup> 迎<sup>⑪</sup> 近年不仕合二罷有候得者、助力仕候者<sup>⑫</sup> 無御座候」という状況であり、松屋一統は逼塞していたようである。また、天明五年二月一八日には、安右衛門の息子の嘉吉が、連夜村内の表具屋・紺屋宅を借りて他所者と賭博を行ったため吟味を受け、尋問に対して口上書を差し出している<sup>⑬</sup>。

松屋没落の一端を垣間見るようである。<sup>51)</sup>

なお、松屋は平松家の屋号かもしれないとの見方があるが、それを示唆するような史料は未だ見つかっていない。平松家は、享保一一年七月七日に平松半兵衛の一三人乗り廻船が今子浦に入津した記録があり、宝暦末から安永にかけては平松九左衛門の廻船が登場する。<sup>54)</sup> 同時期に松屋もいたはずだが、両者の関係は詳らかでない。

## おわりに

松屋善三郎船遭難の浦手形は一で見たように、生き残った治右衛門ら三人の水主から、遭難現場最寄りの隠岐国周吉郡津井村の庄屋・年寄、および郡の大庄屋に宛てた事故顛末の口上書（一〇二三）と、津井村役人・大庄屋から破船の所有者である松屋善三郎に宛てた救難・捜索活動や事後処理の明細を記した手形（二三〇九二）、その正当性を証明した松江藩郡代・代官の奥書（二九二九五）の三部からなる。このような浦手形は、これを受け取った破船の所有者、あるいは船籍地の村役人からその地の代官へ当然報告されるが、遭難現場および事故対応の責を負った地域を支配する代官から、直接送られることもあった。<sup>55)</sup> なぜなら、船籍地の代官がその船の往来手形を発給しているので、航行中の事故は把握しておく必要があったからである。この場合は、湊浦を支配する小室藩代官の新川五左衛門に報告されるべきものであり、【表2】に見える他の浦手形が新川家文書中に残ったのも、そのゆえんである。したがって本文書も、津田秀夫文庫に含まれる中庄新川家文書の一つであると考えら

れる。

新川氏は中世末まで三善姓を称する中庄の地侍で、のち小堀正次に登用され、小室藩飛地になった中庄で代々代官を務めた。天明八年に主家が改易され廃藩となった後も、郷士として在地代官であり続けた。同じ新川一門としては、惣領家として瓦屋荘の地侍であった佐野川新川家、貝塚寺内の領主であった卜半家（貝塚新川家）<sup>ほくはん</sup>があり、中庄新川家は、三善氏が卜半家と結びついて新川氏の一族化したものという。<sup>56)</sup> 前述したように、中庄新川家の子孫宅には古文書約二九〇〇点が伝来しているが、津田秀夫文庫中の中庄新川家文書も本来はその一部であった可能性がある。津田秀夫文庫文書目録8「和泉国南郡・日根郡地域史料」では、中庄新川家文書四六点を数えるが、なぜかこの浦手形は目録に含まれていない。

ところで、本史料が写しであるのは、押印のある浦手形原本が松屋善三郎に届けられたからであろう。代官の新川氏はそれを書写し、控えとして所持していたものと考えられる。わずか一通の浦手形ではあるが、その内容は実に豊富である。享保一〇年（一七二五）という、弁才船による北国廻船史上比較的早い時期に、松屋善三郎が米七五〇石を積載でさる一三人乗りの大型船を所有していたこと、沖乗り帆走で秋田湊まで米・小豆の買い付けに行っていたことのほか、緊急時の操船や救難活動のようす、濡れ米・船滓の入札状況、船宿への預け物、遠隔地での死者の葬送などについても知ることができ、湊浦の廻船活動に新たな情報を提供することとなった。

なお、この海難事故に関して島根県隠岐の島町に問い合わせたところ、



地元で関連文書は見つからないとのことであった。事故の救難処理に当たった浦方の情報——搜索・回収にかかる人員の配備、作業内容や必要経費、代官・下役の出張状況など——について、今後新たな史料の発掘が待たれるとともに、当方でも津田秀夫文庫古文書の目録化を進める過程で、さらなる関係史料が現れることを期待したい。

## 注

① これまでに関西大学が発表した津田秀夫文庫目録について、以下に略記する（著者名略、『紀要』は『関西大学博物館紀要』の略）。

- 1 撰津国平野郷含翠堂・土橋家文書（『紀要』第九号、二〇〇三年）
- 2 撰津国住吉郡桑津村文書（『紀要』第一〇号、二〇〇四年）
- 3 津田秀夫文庫和本類（『紀要』第一一号、二〇〇五年）
- 4 松代藩真田家大坂御用場関係文書（『紀要』第二二号、二〇〇六年）
- 5 長崎関係文書（長崎会所文書を含む）  
（『関西大学東西学術研究所紀要』第四〇号、二〇〇七年）
- 6 播磨国赤穂郡若狭野浅野隼人家関係文書  
（『紀要』第一三三号、二〇〇七年）
- 7 河内国丹北郡松原村・別所村文書（『紀要』第一四号、二〇〇八年）
- 8 和泉国南郡・日根郡地域史料  
（貝塚寺内卜半家文書・中庄新川家文書ほか）  
（『紀要』第一五号、二〇〇九年）
- 9 撰津国住吉郡喜連村文書（『紀要』第一七号、二〇一二年）
- ② 津田秀夫文庫古文書二七―二六。

③ 金指正三『近世海難救助制度の研究』吉川弘文館、一九六八年、第一章第一節。

④ 寛永一三年八月二日付の海難救助法令は次の通りである。

### 定

一、公儀之舟は不及申、諸船共に難風に逢候時は助舟を可出、磯近キ所は成程精を入、不破損様に可肝煎事

一、船破損之時、舟主頼候におゐてハ、其浦之者荷物精を入、可取上之、然は其上る所の荷物之内、浮荷物は廿歩一、沈荷物は拾歩一、但川舟ハ、浮荷物ハ三拾歩一、沈荷物ハ廿歩一、其取上候ものに可遣事  
一、於冲荷物ハね候時ハ、其舟着候所之湊にて、代官下代并庄屋出合、遂穿鑿、舟に相残荷物之分書付之、証文可出事

附、船頭浦之者と申合、荷物盗取之、はね候之由申におゐてハ、後日に聞候共、船頭は勿論、申合候族不殘死罪、其浦は過料として、家毎に鳥目拾疋宛可出事

右条々、可相守此旨、惣て悪敷儀仕におゐてハ、其所之者ハ不及申、他所より成共、訴人に可出、御褒美可被下之、其上科人之儀ハ、隨罪之輕重、可被 仰付者也、仍如件

寛永十三年八月二日

〔御当家令条〕卷一九、石井良助編『近世法制史料叢書 卷二』弘文堂、一九三九年、一一六―一七頁）

⑤ 前掲③、金指『近世海難救助制度の研究』第二章第四節。積荷が幕府代官領や諸藩からの廻米の場合は、とくに入念に記述され、厳しい取り調べが行われていたことをうかがわせる。

⑥ 隠岐国は寛永一五年から幕府領となったが、大名預所として出雲国松江藩に預けられた。その後、貞享四年一二月に預け地を解かれ、いったん石

見銀山領の大森代官管轄下に置かれたが、享保五年六月、再び松江藩預りとなる。享保の改革によって幕府領での大庄屋制は廃止されたが、松江藩預け地に復した隠岐国では、それに逆行する施策がとられた。すなわち、享保六年から大庄屋制が採用され、島前の海士・知夫二郡を合わせて一名、島後の周吉・穩地二郡に各一名の大庄屋が置かれた。島国で交通不便な土地柄、代官所と村役人の間の事務連絡の円滑化をはかる意図があったとされる（永海一正『近世隠岐島史の研究』報光社、一九七二年、一三四頁）。

⑦ 「二九四」の肩書にある松平出羽守は松江藩松平家五代藩主、宣維<sup>のぶすみ</sup>。郡代は島後の矢尾村<sup>やび</sup>（西郷）に、代官は島前の別府村と島後の矢尾村に各一名が置かれた。滝弥五左衛門は島後の代官である。

⑧ 中庄新川家文書（新川勲子氏所蔵、以下、津田秀夫文庫中の同文書と区別するため、新川家所蔵文書と記す）は、泉佐野市史編さん委員会が一九九〇年代に悉皆調査を行っている（近藤孝敏「中世末～近世初頭の『中庄新川家文書』」『泉佐野市史研究』九、泉佐野市教育委員会、二〇〇三年、一頁）。このうち湊浦廻船関係の史料三九点はつとに、野村豊『近世漁村史料の研究——大阪湾沿岸漁村学術調査報告——』（三省堂、一九五六年）の中で、「第五 新川貞久氏所蔵古文書並びに古記録（和泉国泉南郡旧中庄村）」として紹介されている。本稿で取り上げた浦手形をはじめとする湊浦廻船史料の大半は、本書の翻刻文に基いた。

⑨ 【表2】3以外の出典は以下の通り。1…前掲⑧、野村『近世漁村史料の研究』（以下、野村と略す）三五二～五三頁、八番文書、2…新川家所蔵文書八一五一、4…野村三五五～五八頁、一三番文書、5…野村三六一～六三頁、一九番文書、積石数は『新修泉佐野市史 第二・三卷』（書誌情報は②②）一二二頁、6…野村三六六～六八頁、二五番文書、7…野村三六九～七〇頁、二七番文書。

なお、【表2】2については、これまで海難場所を「西高浦」とし、遠江国内に当てられていたが、今回、肥前国彼杵郡「面高浦<sup>めんたか</sup>」であることを確認した。

⑩ 石井謙治『ものと人間の文化史 和船Ⅰ』法政大学出版局、一九九五年、三四六～五一頁。

⑪ 津田秀夫文庫古文書一三―三四。参考までに翻刻文を掲げる。

（端裏書）

「安永六四年八月廿八日申刻、難風<sup>二</sup>而於湊浦、泉州樽井村船及難義候二付、於湊村致介抱せし砌、庄屋共手前江取置候一札写」

#### 一札之事

一、私共儀、泉州樽井浦小廻シ船<sup>二</sup>而御座候、此度上方江運賃<sup>二</sup>而さつまいも并煎さこ積参候、然処昨夕七ツ時、俄ニ北風強吹かけ難儀仕、無是非御当浦江着仕候処、早速人足御出シ被下、船并船具・積荷物共無滞御揚ヶさせ被下、其上船頭・水主・積荷主共厚ク預御助抱、勿論昼夜番人足迄為御附被下、千万忝仕合ニ奉存候、右御苦勞ニよつて船痛少々之儀二付、致取繕、揚ヶ荷物船積仕、乗帰り申度旨御願申上候処、御間届被遊被下、勝手次第乗帰り候様ニと御申附被遊、奉畏候、何角と御苦勞ニ罷成、其上入用銀等も御座候処、御用捨被遊被下、千万忝奉存候、然上者、此船主・荷主・船頭・水主者不及申上、後日ニ外合いケ様之儀申候共、我々罷出埒明、少も御難儀懸ケ中間敷候、為後日仍<sup>而</sup>一札如件

泉州樽井浦船主

六兵衛印

船頭

吉兵衛印

水主

兵右衛門印

安永六丁酉年八月廿九日



同 喜市郎印

積荷主

四郎兵衛印

泉州日根郡中之庄湊浦

御庄屋

長右衛門様

御年寄

重右衛門様

- ⑫ 船首の太い一本水押<sup>みおし</sup>を特徴とする船型で、本来は瀬戸内でもにも使用された中型廻船であったが、次第に大型化し、伊勢船・二形船<sup>ふたなり</sup>・北国船などの大型輸送船にとって代わった（石井謙治『ものと人間の文化史 和船Ⅱ』法政大学出版局、一九九五年、一五二～五九頁）。

- ⑬ 本史料では「治・右衛門」と「次・右衛門」の二種の記名が見られるが、本稿の叙述においては、船方の差出人に見える「治・右衛門」で統一した。

- ⑭ 石井謙治「帆について（下）」——特に商船の積石数と帆端数との関係について——『海事史研究』二（日本海事史学会、一九六四年）によると、当時の帆は、木綿の反物を二枚重ねて、太い木綿糸で横に刺し子を施した「刺し帆」で、それを三反寄せてまつり合わせたものが帆布一端であり、もとは幅三尺ほどであった。帆の規模はそれを何端綴り合わせて作られているかによって示され、一八端帆とは帆布一八端から成っている。一八世紀中頃以降になると一般的に、帆の強度を上げるため帆布の幅が狭くなり、かつ天明年間には「松右衛門帆」と呼ばれる厚木綿の強靱な「織帆」が発明されて急速に普及するにおよび、一端の幅は二尺～二尺五寸になった。たとえば、幅広の一八端帆は、幅の狭い二二端帆とはほぼ同等の大きさである。石井氏はこの二種類のサイズを区別して、前者を「低端数型」、後者を

「高端数型」と名付けた。低端数型から高端数型への移行は、享保期から始まったようで、早いものでは享保一一年の城米積船の例がある。帆端数（S）と積石数（W）は指数関数的な関係にあって、低端数型は、 $S = 0.97W^{0.87}$ 、高端数型は、 $S = 2.0W^{0.87}$ の公式が成り立つという。享保一〇年の本件の場合、遭難の数年前に新造されている可能性があり、低端数型か高端数型かの判断は難しく、いちおうここでは、Wを七〇〇および七五〇として両式からSを求め、小数点以下を切り捨てた。

- ⑮ 前掲⑩、石井『和船Ⅰ』一九五～九九頁。

- ⑯ いわゆる西郷湊（港）は、近世には矢尾村・目貫村・宇屋村（宇屋町ともいう。東郷村の枝郷）にまたがっていて、矢尾村湊・目貫村湊・宇屋町湊などと区々の呼称もあった。そのため、「往々差支、不体裁ノ儀ニ有之候」との理由で、明治七年一月二八日、三地区の合併によって湊名を統一するための願書が伊集院鳥取県権参事宛に出され、西郷湊町が誕生した。西郷湾は東湾・西湾に分かれ、東湾は「上り間<sup>のぼり</sup>」と称して下関・上方へ向かう上り船が、西湾は「下り間<sup>くだり</sup>」と称して北国へ向かう下り船が、それぞれ停泊していた。西郷湾に入るには、東に金峯山、西に愛宕山をそれぞれ擁する岬の間を通る。廻船業がまだ盛んであった明治初年には、「東は金峯山、西は愛宕山、中を飾るは宝船」という流行歌があったという。（松浦千足「西廻り廻船と西郷港」『隠岐の文化財』六、隠岐島前教育委員会・隠岐島後教育委員会、一九八八年）。

なお、島前にも上り間（別府湾）・下り間（浦郷湾）があり、隠岐周辺の花難事故は七月から九月にかけて、上り船に多いという傾向がうかがわれるという（永海一正『隠岐の歴史——改訂版——』今井書店、一九八六年、一三三頁）。

隠岐は風待ち港として、北国廻船の主要な寄港地であったが、島前西ノ

島に残る船問屋木村家の「御客船控帳」の分析の結果、隠岐入港の帆船は寛文〜文化期には漸増するのに対し、文政以降は激増しており、西廻り航路を航行する大型船団の入港が特色になるという（田中豊治『隠岐島の歴史地理学的研究』古今書院、一九七九年、一九三〜九五頁）。享保一〇年の沖乗りによる松屋善三郎船の隠岐寄港は時期的に早いほうである。

- ①⑦ 山田淳一「弁才船の漂流…なぜ帆柱を切ったのか」『海事博物館研究年報』三七、二〇〇九年。（[www.lib.kobe-u.ac.jp/repository/81005821.pdf](http://www.lib.kobe-u.ac.jp/repository/81005821.pdf)）二〇一九年一〇月一二日閲覧）

- ①⑧ 搭載された六頭の碇は四爪碇で、それぞれ重量が違っており、一番重いものが一番碇である。ここでは二番目・三番目に重い碇を使用している。また、船の規模によって搭載数が異なるが、大型船は六頭から八頭であり、八頭が最多とされる。その場合、一番碇は重さ八〇貫（約三〇〇キログラム）から一〇〇貫で、以下五貫ずつ軽量のものが用いられたという。碇に取り付けられた加賀芋（かがす・かがそ・かがお）網は、上質の芋麻（カラムシ）を材料にしたもので、最も張力が強く、碇綱として最良であった（堀内雅文『大和型船——船体・船道具編——』成山堂書店、二〇〇一年、一五五〜六三頁）。

- ①⑨ 西郷町誌編さん委員会編『西郷町誌 上巻』西郷町役場、一九七五年、一二頁第5図および一九〜二二頁。

- ②⑩ 「増補隠州記」（貞享五年）津井村の項、島根県編『新修島根県史 史料篇二 近世上』島根県、一九六五年、二二二〜二三三頁。

- ②⑪ 前掲①⑨、『西郷町誌 上巻』二四頁第10図。かつては、千畳敷へ行く渡し舟があったという（隠岐の島町教育委員会社会教育課文化振興係 岩崎ことい氏の御教示による）。

- ②② 泉佐野市史編さん委員会編『新修泉佐野市史 第二・三巻 通史編 近

世・近代・現代』清文堂出版、二〇〇九年、九八頁に、代官新川五左衛門が発給した寛文九年二月一日付の船往來手形の翻刻文が、九九頁に往來手形を納めた「御往來箱」の写真が、それぞれ掲載されている。

- ②③ 滝本誠一校閲『三貨図彙』白東社、一九三二年、八二九頁の数値による。米価には広島米以外に備前米と中国米があり、前者は広島米より数匁高く、後者は数匁安い。

- ②④ この事故に匹敵する多数の死者・行方不明者を出した海難のケースとして、【表2】6、宝暦一三年末に志摩国神島で起こった破船事故があげられる。そのときは死者三名・行方不明者九名で、享保一〇年と比較して遺体の発見数がかなり少ない。その理由として、潮流の影響以外に、事故が起こった時期があげられよう。新暦に直すと、享保一〇年の事故は九月九日で残暑のさなか、宝暦一三年の事故は一月二四日の厳冬期であり、遺体の腐敗状況に大きな差がある。遺体の浮揚が発見される日数は、九月が平均三・六四日、一月は二・八〇〇日であり（谷鋭三郎「水死体の浮揚に関する研究」『昭和医学雑誌』二二・一、一九六一年、五七頁第1表）、享保一〇年の事故が一週間足らずで八人の遺体を収容できた説明がつく。

- ②⑤ 宝暦一三年の事故の場合、神島村にある寺院は曹洞宗の三か寺だけであった。おそらく希望する宗旨でなかったであろうが、たった一人助かった水主の文七は、そのうち海蔵寺に溺死者三名の葬儀を依頼し、各方面からの協力も得て、無事に同村の墓地へ土葬してもらうことができた。海蔵寺では、行方不明の九名も溺死したものととして、法号を授け回向を行った。

なお、享保一〇年の事故では、死者を弔った寺からの証文は見つかっていない。だが、右記の海蔵寺から、文七と鳥羽浦の船問屋である佐野屋久助（文七の養生先）に宛てた埋葬・回向の一札があり（前掲⑧、野村『近世漁村史料の研究』三六三〜六四頁、二二番文書）、同様の形式であったこ

とが推測される。

②6 この一札についても写しなどは残っていないが、宝暦一三年の事故では、浦手形とほぼ同内容の「進之置申一札之事」が、船主平松九左衛門の代理人弥三右衛門と、水主文七、船問屋の佐野屋久助の連名で、神島村庄屋・肝煎へ出されている（同右、三六五～六六頁、二四番文書）。おそらく浦方はこれを下敷きにして、浦手形の文面を作成したと考えられる。手続きのうえで、浦手形の発給を求める船方の口上書とは別に、事故と救難処理についての報告内容が正確であること、何か問題が起こったときには船方が全責任を負うことを誓った一札を、浦方に残したのである。

②7 「中庄湊・田出両村帳」（元禄九年七月一九日）、泉佐野市史編さん委員会編『新修泉佐野市史 第七・八巻 史料編 近世Ⅱ・近代・現代』清文堂出版、二〇〇七年、四～五頁。

②8 「湊村田畑屋敷検地年号改図」（図番13）および「中庄絵図」（同14）、泉佐野市史編さん委員会編『新修泉佐野市史 第一三巻 絵図地図編』清文堂出版、二〇〇九年所収。

②9 「和泉国分間絵図写」（図番5）、同右。

③0 『特別展 江戸時代の泉佐野——うら・みなと・まち——』歴史館いずみさの、一九九八年、一〇頁。

③1 前掲②、『新修泉佐野市史 第二・三巻』九四～九七頁。

③2 中川すがね「寛文・延宝期の上方廻船——泉州日根郡湊浦の新屋の活動を事例に——」『甲子園大学紀要 人間文化学部』七（C）、二〇〇四年。

なお、この新屋については、寛永八年頃に中庄新川家か分家の北出新谷家の出身者が独立して開業したのではないかとの見方がある（堺古文書研究会編『泉みなと海商新屋』二〇〇二年、二二頁）。

③3 前掲⑧、野村『近世漁村史料の研究』三七一～七二頁、三一番文書。

③4 同右、三七四頁、三五番文書。

③5 北林千鶴「泉州日根郡湊浦廻船について」『泉佐野市史研究』九、泉佐野市教育委員会、二〇〇三年、二五～二九頁、および前掲③、中川「寛文・延宝期の上方廻船」二五頁表2の湊浦の項、ただし寅年が元禄一〇年になつており、一年の誤植と思われる。

③6 前掲⑧、野村『近世漁村史料の研究』三五八～五九頁、一四・一五番文書。四月二八日、秋田湊で長右衛門船の乗組員、長八（三五歳）と善四郎（三七歳）が逃亡している。米の買い積みで停泊中の事件であろう。

③7 柚木学『近世海運史の研究』法政大学出版局、一九七九年、三五二頁。

③8 柴田実編『泉佐野市史 復刻版』泉佐野市役所、一九八〇年（原本は一九五八年）、二五五頁。

③9 日本海の長距離航海は、春の彼岸から下り始め、秋の彼岸から上り始めるのが航海季節としての限界だという（堀内雅文『大和型船——航海技術編——』成山堂書店、一九八二年、八頁）。松屋善三郎船は、四月二五日に湊浦を出航し、五月二八日に秋田湊着、米と大豆を積み込んで佐渡の小木浦と沢根浦に停泊したのは七月五～一八日である。同じ佐渡の北端、真更川村鴨島の船宿土屋三十郎方には「諸廻船入津留帳」が残っており、それには佐野浦廻船が散見される（岡津市誌編さん委員会編『岡津市誌 資料編』岡津市、一九八四年所収）。享保一〇～一九年の記録を見ると一〇件の入津があり、下りが七件で入津日は二月二四日から五月六日、上りは三件で入津日は六月一二日から七月八日である。上りについてはそれぞれ、出羽国酒田・能代・本荘より米を積んできたことが注記されている。佐野浦廻船は九～一三人乗りで、松屋善三郎船と同様の規模であり、佐渡での停泊地は異なっても、湊浦廻船と佐野浦廻船は、ほぼ同じスケジュールで日本海を航行していたことがわかる。

- ④① 空船は乾舷部分が大きく、風波強い外洋では傾斜や動揺しやすいこと、舵が浅くなつて効きにくいことから、船の釣合いをとって航海の安全を図るために、石やその代替荷物を載せていた（前掲③⑨、堀内『大和型船——航海技術編——』一三六頁）。

- ④① 元文元年（一七三六）には、佐野浦の直乗船頭の市郎兵衛が、出羽国庄内湊で米一七三一俵を買い積みし、復路は松屋善三郎と同じく佐渡・能登・隠岐を経由している。すなわち、七月二六日庄内湊出船、同二九日佐渡小木湊入津、八月一六日小木湊出船、同一八日能登福浦入津、九月四日福浦出船、同六月（日の誤り）隠岐島前湊入津、同一二日島前湊出船の日程であつた。享保・元文期には、西廻り航路の一般的な沖乗りコースであつたと思われる。市郎兵衛船はその後、難風と大雨で石見国温泉津湊に打ち寄せられた（温泉津町誌編さん委員会編『温泉津町誌 別巻（資料編）』温泉津町、一九九六年、一七一〜七二頁）。

- ④② 前掲③⑤、北林「泉州日根郡湊浦廻船について」二九〜三五頁。

- ④③ 前掲③②、中川「寛文・延宝期の上方廻船」四二頁。

- ④④ 前掲③⑦、柚木『近世海運史の研究』三五二〜五三頁。

- ④⑤ 前掲⑩、石井『和船Ⅰ』一六〇〜六三頁。

- ④⑥ 同右、二三五〜三八頁。『廻船安乗録』（文政七年）の「船年数保ち方の事」によれば、「十八、九年目を乗納めと限るべし」とする。新造から六〜七年目に船材接合部に充填材を詰め直し、一一〜二年目に腐朽箇所を新材に取り換えるなどの大修理「中作事」が必要という。また、中作事前に中古船として売りに出される場合があり、これを「姫入船」と言った。（[archive.wvl.waseda.ac.jp/kosho/tsu04/tsu04\\_05207/](http://archive.wvl.waseda.ac.jp/kosho/tsu04/tsu04_05207/) 一〇一九年十一月六日閲覧）

- ④⑦ 津田秀夫文庫古文書一三一四八。

- ④⑧ 柚木学『日本水上交通史論集 第二巻 続日本海上交通史』文献出版、一九八七年、四〇八〜三九頁。

- ④⑨ 新川家所蔵文書四一〜一五。

- ⑤① 新川家所蔵文書一〇〜六五。

- ⑤① その後の松屋について消息を知ることができないが、湊浦の北方、貝塚の浦方には、天保頃、干鰯仲買商の松屋藤八（津田秀夫文庫古文書三六一五八）および諸色問屋の松屋安太郎（同一七一四〇・四六ほか）がいた。湊浦の松屋と何らかの関係があるかもしれない。

- ⑤② 前掲②、『新修泉佐野市史 第二・三巻』一〇二頁。

- ⑤③ ④⑧と同じ。

- ⑤④ 前掲③⑤、北林「泉州日根郡湊浦廻船について」三三頁表3、および本稿【表2】。

- ⑤⑤ 本稿【表2】2の海難事故では、「灘証文」に面高浦を管轄する大村藩崎戸大番所の在番、小川文太夫から新川五左衛門に宛てた裏書認証があり、同日（正月二四日）付で小川より新川宛の送り状が添えられている（新川家所蔵文書八一〜四八）。また、同5の場合は、岸和田藩の浦奉行山口恒右衛門から新川五左衛門に宛てて、奥書認証されている。

- ⑤⑥ 前掲⑧、近藤「中世末〜近世初頭の『中庄新川家文書』」一〜五頁。

## 【付記】

本稿の作成にあたり、新川家文書写真資料の閲覧等を御許可くださいました新川勲子様、手続きその他で御世話になりました泉佐野市教育委員会文化財保護課日根荘係の東原和代氏、また、数々の御教示を賜りました隠岐の島町教育委員会社会教育課文化振興係の岩崎ことい氏に、この場を借りて厚く御礼を申し上げます。